

## 研究者モラルハザードへの感想

2006.8.7.

中井さんの要請に答える前に小生の精神的道徳的基盤が形成された経緯らしきものを書いておきます。

大正生まれだから、明治からの富国強兵、忠孝という日常的生活規律の上に、突如、皇国史観という国粹精神が強制された世代に育った。

個人として受けた教育は、家庭では、父は海軍兵として呉に居ましたが薬学校出身なので医務室勤務だったそうです。或日、残留組と除隊組に分ける身体検査の通知があり、父は検査直前にアルコールを両目に点眼し目を真っ赤にして検査を受けた。トラホームと診断され、即日除隊になったと言っていました。明治41年頃です。

小学校は、父の考えで越境入学をして難波にある市立精華小学校です。入学は昭和5年です。南の繁華街の中心で飲食業、商家、歌舞音曲、色街、花柳界の子供に混じって中学進学予定者が組の半数、十数名ずつ越境入学して来る進学校でした。(同学年生の友人に地唄舞山村流の山村樂正がいますし、後輩に文楽の太夫が何人かいます。)満州事変、5・15事件、卒業直前に2・26事件が起きましたが軍国教育は無かったように記憶しています。忠孝が強調されたとは思いませんが、教育勅語の言葉が時々先生達の口から出たような記憶はあります。日常の行いは誠実たるべし、後めたいことはするなと常に強く教え込まれました。6年生の時は猛烈な受験勉強が放課後にありました。夕暮れとなると、窓から背後に見える南海高島屋の電光掲示板を眺めながら問題を解いていました。校長先生の模擬口頭試問もありました。

中学は府立住吉中学校です。かなりリベラルな学校だったと思います。詩人の伊東静雄先生がおられました。三年生になると、御用学者平泉澄東大教授が著した副読本、国体明徴の特別講義が週一回ずつありましたが、何を教えられたか何一つ残っていません。しかし、日本史の一面のみを教えられたことは事実です。強く擦り込まれたのは孔子、孟子の教えです。この思想は現在でも私の体内に強く残っています。漢文の時間に十八史略や諸葛孔明の出師表などを習い中国故事は私の精神基盤の中に入り、そして、孔子の八条目、修身齊家治國平天下の精神は強く擦り込まれ修身齊家がいつも頭にあります。最近読んだ「林語堂著 中国＝文化と思想 講談社学術文庫」(1935年出版の *My Country and My People* の翻訳)で私の体に注入された思想と行動基盤は林語堂と同年の中国の人々のそれらと余りにも一致するところが多いことを発見し今さらながら我々は中国人同様、中国の哲人の思想に強く影響されていることを知りました。

高校は鹿児島第七高等学校造士館です。寮生活で自主独立精神が確立しました。入学した年の12月に日米開戦。高校では皇国史観も軍国主義も、それらの影は全くなく、自由と自己確立を謳歌する生活でした。

ある先生から、ナチスの巧みな政治行為、例えば、ベルリンオリンピックではギリシャ

から聖火をリレーするから道筋を調査するという口実で、ドイツからギリシャまで将来独軍が侵攻するであろう地勢を精査した、3S政策という民衆の目と心を政治から逸らす愚民政策（3Sとはセックス、スクリーン、スポーツのS）（知らしめずして治めるナチス版）、反ユダヤのワーグナーの音楽が人間を陶醉させる効果がある事を最大限に利用していることなど、政治には必ず為政者が仕組んだ裏があり、この裏を考えるのが重要だと強く言われました。（ナチ時代の若者はメンデルスゾーンの存在も音楽も知りません。）

昭和18年5月に海軍前戦基地鹿屋に招待され、予備将校への勧誘を受けた。私達の分隊の世話をしてくれた東京の私学出身の少尉さんは、こっそりと、軍隊は君達が来るような所では無い、絶対に志願などするなと強く言切りました。

教練査閲があり講評は「丁」。「丁」は不合格です。理由は集合号令に対し、全員がぞろぞろと歩いて整列せず雑然と集まったからです。特に反軍感情を持っていたのではありませんが。後年、名大で五高出身の同年の友人から聞いたのですが、五高でも同じことをしたと。

阪大理物理に入学したのは昭和18年10月。願書を出してから入学定員が3名増え無試験。菊池先生は海軍目黒の技術研究所へ移られがっかりしました。

11月に徴兵検査を受け、医科と理科系学生は卒業まで入営延期、農学系と文系学生は学徒出陣。

大学でも教練があり、服部緑地へ出かけなくてはなりません。我々理学部1年生の入営先に歩兵部隊を指定された者いませんでした。教練は歩兵の練習。配属将校室へ行き我々の入営先に歩兵部隊はなく教練は歩兵の訓練なので、時間の無駄だと直訴しました。話の判る配属将校で一度よく話を聞こうと、御馳走の昼弁当を用意し化学の榎田先生に伏見先生永宮先生らも同席されました。

数日後、教練は先生方の戦時研究に参加することに代えるという答を聞き、先生方の研究室へ配属されました。19年2月頃です。私と杉本健三、菅浩一君は尾崎誠之助先輩と一緒に総大将奥田毅先生のもとで理研の二号研究の手伝いをするようになりました。北垣敏男、小谷恒之君らは緒方先生のマススペクトログラフの手伝いに参加。

講義は伏見、永宮、浅田、沢田昌雄、岡部金次郎、内山龍雄の諸先生、実験は奥田先生、江原、西脇先輩からの直接指導は無く我々でドイツ語、英語の実験書を読み、あれこれ相談しながら行いました。先生、先輩方はそれぞれ背中で教育されたと思います。硝子細工は工作室の技士に習いました。皆かなりの腕前になりました。

二号研究の総元締である鈴木辰三郎陸軍中佐（当時）は東大嵯峨根先生の元で3年過ごした人で我々学生とも対等に話しをする新婚ほやほやの温厚な人でした。

戦争最中でしたが悲愴感は無く別天地のような実験と勉強の日々でした。

空襲が烈くなったが大衆の精神は健全でした。戦後わかったのは、軍を利用して甘い汁を吸っていた連中が大勢いたことです。また、権威を笠に着た憲兵、特高の殺人行為は戦後暴露されました。この事は朝日新聞の昭和24年9月14日の記事で「(敗戦は)科学

行政の失敗、・・・民族の犠牲によって学び得た自らの醜さ、低劣さを肝に銘じて忘れない」と書いています。

以上長々と書きましたが私の精神行動、批判精神の背景です。

中井さんから近頃のモラル低下について何か意見をと要請された時、戦前の旧制高校制度が消えたのが一つの原因ではないかと思っ、新制度制定時の議論を調べました。教育学会の重鎮、海後宗臣の著書及び日本教育論争史録を読み、教えられたことは、旧制高校は帝国大学の予備校（帝大の総入学定員は高校卒の総人数より多かった。専門学校等から入る余地があった。医者の跡継ぎが高校で文科に入った者が多くいたのは医学の勉強は後回しにして青春時代の人生を自由闊達に送っておこうという魂胆。）で所謂エリート教育のピラミッド的構造の帝国大学解体とともに旧制高校も消え、民主的横広りの制度となったということでした。

札幌農学校初期の学生達が日本の精神的指導者となったのは、特別な事情とは言えない。新しく創設される学校には目的がはっきりしている優秀な学生が多く集まる傾向にあるのは、現在でも同じである。札幌農学校の人達が突出しているから、昔は現在より何かにつけて優れていると思ひやすい。

戦前は現在よりモラルが高かったとは言えないことは、朝日新聞が書いているように、「自らの醜さ、低劣さ」があり、政治の面では、多くの疑獄事件があった。

研究の面では象牙の塔と言われたように社会と隔絶された所が強調されたし、研究者は白金の甘鳩を自弁できる経済的余裕があった。私が渡瀬先生に研究室に残して欲しいとお願ひした時、「君達はいいいね、自分の場合、先生から君の家は資産が幾らあるか、給料をあてにして生活するのなら断る、と言われた。」と冗談のように言われました。

さて、本題の研究者モラルについて感想やら小生の意見を書きます。

物理学の研究結果は理論であろうと実験であろうとその価値や正誤は誰が追試しても同じ結果ということで証明される。誤魔化しや作意が入る余地が無い。実験の腕前の良し悪しは結果が出る早さには関係するが結果には関係しない。物理学は、分析化学の大家が落とす試薬1滴と駆け出し研究者が落とす1滴とには結果に大きな差を齎す分野とは全く違う学問の世界である。

最近の分子生物では DNA 配列などは業者が製作した装置が答えを出すから、資料の選択とその資料の取り扱いがその特定の研究者でなければできぬと言う特殊性があり、この所で「誤魔化しや作意」をするか否かがその科学者個人としての倫理道徳が表に出て来る。

倫理道徳が欠如している科学者が世界中に出現しているから、日本人だけの問題ではない。宗教を通して厳しい倫理道徳を幼年時代から擦り込まれている筈の欧米でも倫理道徳が欠如している科学者が出ている。このことは個人個人の精神と倫理道徳の問題として捕らえるべきであろう。教育の欠落とは言えないのではないか。

ここで大正人間が辿って来た思考や研究環境と現在のそれらを比較してみる。

私達は、静かな環境で沈思黙考するのが、先ず研究の出発点だった。勿論その前に声高

に議論を幾日もした。(かの彦坂先生は、奥田先生によると、菊池先生が与えた宿題、「ウランからエネルギーを取り出す方法」を考えておられる時、壁に向った机の椅子に座り、静かに一日中考えておられた。それが幾日も続いたと。)

我々の時代の研究情報は月毎に来る学術誌から得ていた。その後、週毎になり、さらに予報が郵送されて来るようになったが、まだ七日ないし十日という時間の進み方に合わせて脳は働いていた。

現在はどうかだろう。PC の能力は数千、数万倍向上し処理時間はマイクロ秒より早い。情報は完全に電子化し、どのようなものでも、価値や正誤の判定なく、大量に存在し、何時でも PC 画面上に選択し呼び出せる。人間の脳の働き速度が PC 能力とともに進歩したとは思えないが、情報量は個人の脳の受容判断能力を遙かに越えて何時でも得られる。

幾つかの研究室を訪ねる機会があるが、大勢の院生は声も立てず、専ら PC 画面を睨みキイを叩いている。こちらが横に立とうが見向きもしないし、挨拶もしない。彼等は何時、勉強し思考するのだろうか疑問に思っている。

話題になった慶応の女性研究者と韓国の研究者に共通しているのは、いずれも早くから将来の成果が期待されている。報道機関も騒ぎ立て極度に持ち上げ、彼等を中心にした研究にのみ高額な研究費が与えられ、少し離れた関連研究には殆ど与えられないという忤んだ状態がつくられた。

中心の彼等には常に短時間後の更なる研究成果が期待され連続して報告することが半ば義務的に課せられていて、彼等の虚に近い名声に実の研究巨費が付随していた。時間や研究速度を越える期待がされた。

我々の時代における時間の進み方と研究速度は人間の能力に応じたものだったと言える。

偶々読んだ学士会7月発行の「先学訪問」薬学者柴田承二編に「論文の偽作問題」という話題でオランダのケーグル教授とエルクスレーベシ助手の高等菌類色素についての論文が30年も経った戦後に意識的に作られたものであることが証明されたと話されています。研究対象が今回のように特殊で同業の他の研究者と言えども簡単に同種の資料が得られないものという点で偽作、作意が入る余地があったことも似ている。

近頃は、話題になった彼等程ではないが、目玉となるテーマを作り、虚に近い持ち挙げ評価をして研究費を集中的に投下する傾向にある。実を伴わぬ虚な騒ぎ方で宣伝をせねば無視される時代となった。じっくりと静かな環境で考える時間的余裕が与えられなくなった。

日々ホームページの情報を更新しないと、マスコミや研究費の元締めの国の機関から見放される忙しい時代となった。

研究費が巨額となりその用途方法が人間の能力を越えている場合が目につく。お金の額と時間の進み方が人間の能力を越えたところに現在モラル破壊と言われる根源があると思っている。

話は逸れるが、「道徳なき経済は犯罪」と言われている。エンロン然り、会社の実態、

生産の成果等の「実」と無関係に株式操作で株価を上下させ「虚」の大金を捻出することが、新事業の如く持て囃されたが、結局は犯罪行為だった。個人の日常生活における金銭感覚を越えた大金を手にするると、その人間の金銭感覚が狂い、悲しいかな欲望が顔を出す。このことは経済分野に留まらず科学の研究者にも同じ落とし穴がある。